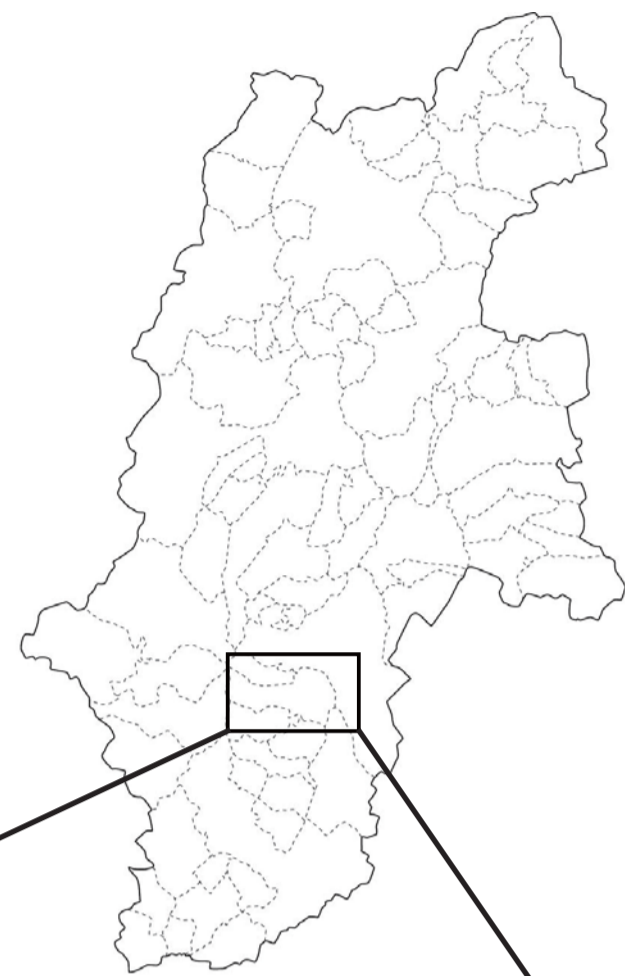


# 第三章 登戸研究所の役割の変化と中野学校 —伊那地方を中心に—

登戸研究所が疎開をした地域の中でも長野県の伊那地方での記録を見てみると、疎開後は研究施設であること以上に兵器工場の役割が大きくなったことが見えてきます。元来、秘密戦の研究を行うことを任務としていた登戸研究所の役割そのものが変化したことを意味します。それは中野学校の役割の変化と時期を同じくしており、工場として生産する兵器は遊撃戦部隊の使用する爆弾などの製造が中心になりました。つまり、その兵器を使用する実戦部隊となっていた中野学校との関連性が深まり一体化していったと言えます。それでは伊那地方の疎開先で何がおこなわれたのかを検証しながら登戸研究所が実戦部隊に近づいていく様子を見ていきます。



伊那谷遠景（資料館撮影）  
天竜川の兩岸の平野を南アルプスと中央アルプスが挟む。



宮田村・駒ヶ根市・飯島町拡大図  
(国土地理院2万5千分の1地図より資料館作成)



## ①本部（宮田村・真慶寺）

1945(昭和20)年3月頃より、本部が設置された宮田村の真慶寺では庶務・経理・人事などを担っていました。ほとんど全ての畳をはぎ、板張りにし使用されたといわれます。本尊を安置する内陣に隣り合わせの「室中の間」が登戸研究所長の篠田鏡中将、総務科長と第一科長を兼任する草場季喜少将らのための秘密の会議室となりました。現在でも真慶寺には登戸研究所の蔵書印が残っている書籍が約50冊あります。これらの内容は多岐に渡りますが、中でも細菌学の文献が見



真慶寺本堂の仏間（手前）と室中の間（奥）（資料館撮影）  
室中の間は本尊の安置された内陣と隣り合わせになっていて、襖で仕切ることができる。秘密の会議に使用されたほか、最も秘密であった上海や南京への出張の書類などが保管されていた。

られるということは登戸研究所でこれらの研究が行われていた証拠となります。また、当時の寺の記録からは、寺を管理する僧侶がいない間に登戸研究所疎開が決定され、押し切られた可能性が示唆されています。資材の受け取りの中心でもあったようで、各工場で使用するためか、真慶寺近くの元宮神社の舞台には油が大量に積まれていたという証言もあります。

## 真慶寺に残っていた書籍の一覧

医事及雑誌索引第十七巻第一号 磁気と磁石 / 大ニウギニアの相貌 / 日本民族論  
 X線陰極線検査 / 支那省別全誌第4巻 貴州省 上 / テレビジョン発達史 / 農芸化学の三十年  
 大阪医事新誌第13巻 下 / 下瀬火薬発明記 / 鶏・蜘蛛・蜜蜂 / 火花・稲妻・宇宙線  
 大阪医事新誌第8巻 / ジャワを中心とした南方の実相 / 南圻畜産概要 / ビルマの農産資源  
 オーストラリア風土記 / 職域講話集 鉄鋼編 / 南洋叢書第4巻 シャム篇 / 仏印進駐挺身隊記  
 感光色素 / 新興化学の常識 / 南洋地理体系 / ボルネオ原住民の研究 / 南洋の真珠 / 南への旅客  
 蛍光体 / 水質の科学 / 航空心理 / 世界農業地理 / 西ニューギニアの民族 / 蘭学のこころ  
 細菌の科学 / 増補三訂蒙和辞典 / 日本微生物学病理学雑誌第33巻 / DACHSHUNDS (洋書)  
 史記国字解 / 大南洋見聞記 / 日本病理学会会誌第4巻 / The complete fox terrier (洋書)



中庭から望む真慶寺 (資料館撮影)

## ②旧陸軍登戸研究所中沢分室 (製造所)

伊那地方には、所員は家族を連れて疎開をしたことから本格的な移転であることが推測でき、研究部門の本部と第一科、第二科、第四科が疎開、研究を進める傍ら工場を拡大したことがわかります。特に中沢分室では中沢、伊那村、赤穂の各国民学校の高等科学徒(12~13歳)を動員し、登戸研究所の工場で缶詰型爆弾を作っていました。研究所や工場は地域内で分散しており、敗戦直前には一層の拡大傾向にありました。陸軍兵器行政本部の記録では中沢分室とありますが、伊那地域に残る記録では「中沢製造所」という名前が使われています。

### (1) 中沢国民学校 (現・駒ヶ根市立中沢小学校)

中沢では中沢国民学校を研究・製造部門の本部とし、所長である篠田籙中将が指揮していました。地域内各所が研究所・工場として借上げられ、所員は家族とともに割烹屋や民家に分宿しました。当時の動員された学徒の証言に共通するのは、研「う」と思われる変形自在のパテ状の火薬についてやそれを詰めた缶詰型爆弾の製造です。また、工場に動員された学徒たちは、天竜川で爆破実験の見学をしたとの証言がありますが、これは学徒たちの士気の向上のためと考えられ、生産性の向上が図られたことがわかります。また本土決戦での戦闘を見据えてか、国民学校内に併設されていた青年学校では多くの兵器が用意されていました。

| 雑品 | 竹刀 | 保芯筒 | 遊動的 | 円ヒ | 十字 | 手旗  | 手榴弾 | 幕的 | 木銃 | 擲弾筒 | 軽機 | 銃剣 | 小銃 | 品名 | 数量 | 接收月日   | 届出のものなりや否や | 接收状況     |
|----|----|-----|-----|----|----|-----|-----|----|----|-----|----|----|----|----|----|--------|------------|----------|
|    | 五  | 一七  | 五   | 二  | 二  | 一〇〇 | 三〇  | 一五 | 七  | 三   | 四  | 八〇 | 八九 |    |    | 一〇月二五日 | 届出         | 米兵二名通訳一名 |
| 全  | 全  | 全   | 全   | 全  | 全  | 全   | 全   | 全  | 全  | 全   | 全  | 全  | 全  |    |    |        |            |          |
| 〃  | 〃  | 〃   | 〃   | 〃  | 〃  | 否   | 届出  | 否  | 否  | 〃   | 〃  | 〃  | 〃  |    |    |        |            |          |

昭和二十年十一月十八日  
 上伊那地方事務所長殿  
 上伊那郡中澤青年学校長  
 青年学校武器等接收せられし品名調査に関する件  
 二〇総号外標記の件に関し先の通り報告候也  
 中澤青年学校

中沢青年学校申立書綴より『青年学校武器等接收せられし品名調』(駒ヶ根市教育委員会提供資料より資料館書起こし) 米軍に接收された兵器からどのような兵器を用意していたかがわかる。実物はカタカナ。

#### 上村睦生氏 (中沢在住, 終戦時9才) の証言

- ・中沢国民学校には学徒隊を含めるとかなり多くの人がいた
- ・軍のトラックが学校に横付けされ、様々な物資が体育館に運び込まれるのを見て、「軍にはなんでもあるのだなあ」と思いながら見ていた
- ・学校近くの私の家にも技術将校の久保田実夫が身重の妻を連れて下宿した。父(義康氏)は事務の技術があったため庶務係として研究所に勤め、夜は久保田氏と茶を飲みながら世間話をしていた
- ・軍から「登戸のことは絶対に話すな」と厳しく口止めされていたこともあり、家では研究所のことはあまり話題にならなかったが、言葉の端端で爆弾を作っていることや、化学兵器を研究していることは推測できた
- ・[猛毒を合成できる]黄燐まであることから何でも作られるのではないかと思った
- ・ゴムや蠟が沢山あった
- ・研究所解散後に当時は貴重品だった缶詰が配給された

## (2) 国民学校以外の中沢地域での疎開先

中沢国民学校以外にも中沢地域には登戸研究所関連の研究所、工場がありました。ある大きな民家は二階部分を借上げ第二科の写真研究担当である丸山少佐が研究室兼工場として使用しており、戦後も長らく当時使用された写真関連の器材などが残っていました。他にも次の表が示すように様々な工場が点在していました。また登戸研究所長の篠田鏢が中沢で下宿していた民家の離れに家族を連れて来ていたことなどからも、一時的とはいえ難い大変な移転となったことがうかがえます。



中沢・H 邸（資料館撮影）  
第二科の丸山少佐の研究室として二階が借り上げられた。敗戦直後は進駐軍に取り囲まれたという。戦後しばらくの間、写真関係の研究資料が多く残されていた。展示のガスマスクはここで発見されたもの。

### 中沢地域での主な登戸研究所の疎開先

| 疎開先名称  | 研究内容など               | 備考         |
|--------|----------------------|------------|
| 中沢国民学校 | 第一科、第二科の研究部門の本部・第二工場 | 現・中沢小学校    |
| 中割協議所  | 第一工場                 | 現・中割研修センター |
| 上割協議所  | 工場                   | 地図の欄外東側    |
| H 邸    | 第二科写真関連の研究室          |            |
| 香花社    | 缶詰爆弾用ブリキの型抜き工場       |            |
| 割烹古田   | 所員の下宿                |            |



中沢地域の登戸研究所疎開先の地図  
(国土地理院 2 万 5 千分の 1 地図より資料館作成)

#### 工場で行った作業

(15 歳の時に中沢国民学校の工場に動員された女学生の証言)

第一工場は中割協議所で学校は第二工場だった。第一工場では火薬を詰める缶を伊那商業の生徒と [自分と] 同年の男子が作っていた。それを自分たちの工場へ持ってきて、次のような手順で爆弾に作った。

- ・缶 (5cm × 3cm × 15cm) を学校の河原で水洗いする
- ・男子がその缶の回りを、火薬を詰めても漏れないようハンダ付け
- ・火薬を計ってむすびにする
- ・それを充填作業する (缶の中へ角棒でトントンと隙間なく詰める)
- ・缶の回りの火薬をきれいにふき取り、隙間がないか確認し導火線を付け仕上げる

作業にも慣れ製品ができたころ、実際に爆発して使えるか実験をした。天竜川の今の穴山の浮島の河原で行った。

将校が実験前日「いよいよ明日、お前たちが作ったものが成功するか実験だ。もし不発だったら兵隊さんが死んでしまう。その責任でお前の命もないと思え」と言われていたので、当日は皆で手を取り合って見ていた。そのことは心に染みついて今でも忘れられない。実験は無事成功し、みな大声をあげて喜んだ。

(参考：上伊那郷土研究会  
『伊那路』平成 18 年 8 月号)



天竜川の穴山の浮島の河原 (資料館撮影)

## (3) 赤穂国民学校 (現・駒ヶ根市立赤穂小学校)

赤穂国民学校では登戸研究所は理科校舎などを研究室として使用していました。ここにははじめ登戸研究所の工場がなかったため、赤穂国民学校の学徒は当初、中沢地域へ動員されていました。しかし遠距離であるため 6 月以降は国民学校内の青年学校校舎、第四体錬場<sup>たいれんじょう</sup>に登戸研究所の工場が設置されました。当時の赤穂国民学校の学校日誌には、報奨金や動員数など登戸研究所に関する情報が詳細に記載されています。毎月支給された報奨金の記録から、職員、学徒あわせて赤穂国民学校だけでも 4 月から敗戦までの期間で延べ約 12,000 人が動員され

#### 伊那地方登戸研究所関連 略年表

|                |   |
|----------------|---|
| 1945 (昭和 20) 年 |   |
| 3 ~ 4 月        | 登戸研究所が伊那地方に疎開、中沢・伊那村・赤穂の各国民学校高等科生徒が工場に動員される |
| 4 月            | 飯島国民学校の校舎転用                                 |
| 6 月            | 赤穂国民学校に登戸工場設置                               |
| 6 月            | 飯島国民学校本郷分教場などにも校舎転用依頼                       |
| 8 月 15 日       | 終戦  |
| 8 月 16 日       | 登戸研究所解散式                                    |
| 8 月 24 日       | 登戸学徒出動解散式                                   |
| 10 ~ 11 月      | 各地域を GHQ が視察                                |
| 1946 (昭和 21) 年 |   |
| 3 月 7 日        | 登戸中沢分室完全に引払う                                |

たことがわかります。また報奨金は1日あたり1.1円※（現在で約11,000円）で職員、学徒が同じ金額を受け取っていました。また学校日誌によると、敗戦前日の8月14日は平日にもかかわらず初めて学徒動員がなかったことが記載されており、軍でも重要機関であった登戸研究所には敗戦に関する何かしらの知らせがあったのではないかと考えられます。

赤穂国民学校 昭和二〇年度学校日誌  
(駒ヶ根市教育委員会提供)

報奨金に限らず、登戸研究所への学徒動員に関する記録がほぼ毎日記載されている。伊那地方に残る学校日誌の中では登戸研究所に関する内容が最も多く残っている。

※ 1945年4月分の報奨金は1日当たり1円

## (4) 飯島国民学校 (現・飯島町立飯島小学校)

飯島国民学校には学徒動員の記録はありません。この点より、工場は無く、研究室のみが疎開してきたと考えられます。それを裏付けるかのように、当時の校舎転用に関する資料によると、校舎の用途は特殊兵器研究に関する重要資材倉庫ならびに事務所とあります。教室は7教室140坪分と倉庫60坪の計200坪が転用されました。『長野教育史・別巻二<年表>』には1945年4月に校舎偽装の記録があります。当時の状況を考えるとどこの学校でも行われていたはずですが、飯島のみ記載であるため、大規模



現在の飯島小学校 (資料館撮影)

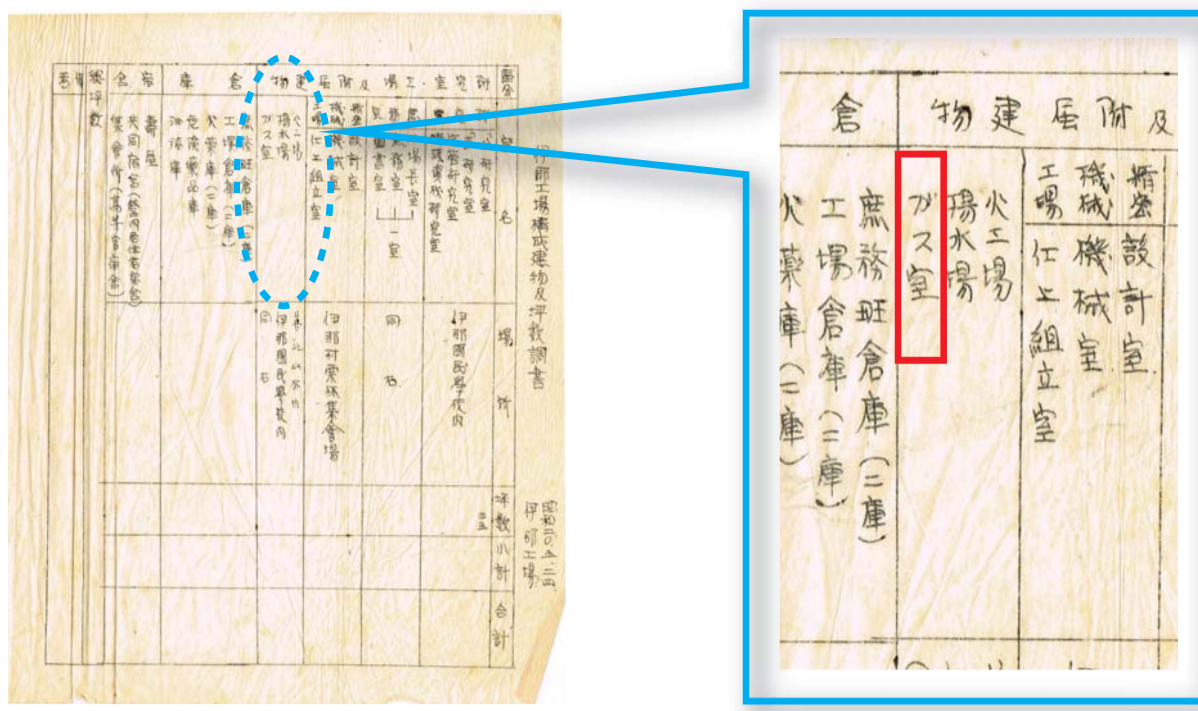
な校舎偽装であったとも考えられます。理由は、第二科第三班<sup>ひじかたひろし</sup>土方博少佐の毒性化合物班（青酸ニトリール研究の担当）が疎開しており、この研究が登戸研究所でも極めて重要な研究だったのではないかとということがあげられます。また、土方氏は細菌班の一員であるため、青酸化合物に加え、細菌攻撃の研究もおこなわれる予定だったとも推測されます。飯島小学校には、登戸研究所が疎開していた期間である「飯島国民学校昭和二〇年度学校日誌」だけが現存しません。

## ③伊那村分工場

伊那村分工場は伊那村国民学校（現・駒ヶ根市立東伊那小学校）を中心に設置され、第二科第一班<sup>ばんしげお</sup>長の伴繁雄少佐（工場長）を筆頭に所員、従業員を併せて44名が働いていました。大規模な工場がないため学徒たちが動員されることはなく、伊那村国民学校の学徒は中沢地域へ動員されました。ここは主に遊撃部隊用の爆薬関係資材の研究機関で、中沢と至近距離でありながら、「分工場」として分離されていました。特殊爆弾の研究を行っていたようで、現存する「構成建物及坪数調書」には「ハ」研究室、「ホ」研究室、ガス室の文字などが見られます。元登戸研究所関係者によると「ハ」は「ハハリユ」という陸軍で使<sup>ひとく</sup>用した爆薬の秘匿名をさすのであれば特殊爆弾の研究と一致します。また信管の研究室があったことがわかりますが、これも爆弾を作るために欠かせないものです。「ホ」の実態は不明ですが、ガス室が計画されていることなどから毒ガスの「ホスゲン」の略という説もあり、これが事実であれ

「伊那村分工場職員及従業員将来状況調書」(木下健蔵氏提供)  
所員らの特技の項目などから、伊那分工場で行っていた研究が化学、爆発物などを扱っていたことがわかる。

ば毒ガスも研究していたこととなります。あえて中沢分室と分けたのは伊那村分工場がこのような秘密の研究を続けたためかもしれません。また、敗戦直後、後片付けに動員された生徒が、登戸所員がサンプルとして用意していた「毒入りチョコレート」を誤食した事例が発生したことから毒物の研究も示唆されます。伊那村分工場解散後も伊那に住み続けた伴氏の旧邸からは、近年、腕時計が数点発見されましたが、これは同氏著書『陸軍登戸研究所の真実』の、登戸研究所で試作研究された遊撃部隊用兵器「時計式時限装置」ではないかと考えられます。



「伊那工場[伊那村分工場]構成建物及坪数調書」(木下健蔵氏寄贈) 伊那村国民学校内にガス室があったことがわかる。疎開先で何を行っていたのかがわかる貴重な一次資料。(現物展示あり。)

第五展示室の「石井式濾水機濾過筒」は伴繁雄氏が伊那村分工場へ疎開した際に持ち込んだもの。全てに「軍事秘密」の刻印が確認できる。上の「伊那工場建物及坪数調書」によると、「ガス室」と記載されたとなりに「揚水場」とあるため、研究に水を使用するために使用したとも考えられる。しかし、本土決戦が現実となった場合、この石井式濾水機濾過筒を使用して細菌戦を展開することも可能である。



## ④伊那地方に見る、登戸研究所、国民義勇戦 とうたい 闘隊そして中野学校

伊那地方の調査から、登戸研究所は疎開後も秘密戦研究をつづけながら第四科（第一科，第二科で開発した量産兵器の工場）の機能を早くから拡大し、主に当時の国民学校校舎を借り上げ、多くの学生を動員し大規模に爆弾の製造を行っていたことが分かります。缶詰型爆弾は遊撃戦での使用が想定された兵器であり、これら製造された兵器を元所員の伴氏は「現地調達品」と呼んでいます。

遊撃部隊兵器

| 品目名称    | 型式  | 用途 | 爆薬種類    | 信管種類       | 効力                       |
|---------|-----|----|---------|------------|--------------------------|
| 小型爆発缶   | 電気式 | 一般 | 研「う」薬三号 | 即時点火具、特殊信管 | 爆破効力半径約4メートル             |
| 缶詰型変形爆薬 | 電気式 | 一般 | 研「う」薬三号 | 即時点火具、特殊信管 | 爆破効力半径約7メートル<br>50キロ軌道切断 |

| 品目名称      | 型式  | 用途 | 時限                | 時限精度            | 時限法            | 摘要        |
|-----------|-----|----|-------------------|-----------------|----------------|-----------|
| 時計式時限装置一号 | 電気式 | 一般 | (長)12時間<br>(短)60分 | (±)30分<br>(±)2分 | 長短針利用          | 電源特殊注水電池  |
| 化学信管      | 化学的 | 一般 | 50分(常温)           | (±)20分          | 特殊腐蝕液によるピアノ線腐蝕 | 南方用       |
| 撃発式時限装置   | 機械的 | 一般 | 8日以内              | (±)1時間          | 回転板利用          | 撃発式長時限時計式 |
| 即時点火具     | 曳索的 | 一般 | 40秒               | —               | 黒色火薬による        | 防湿缶取容筒入   |

| 品目名称     | 型式   | 用途         | 主組成分               | 火拵散布範囲(半径)    | 摘要                |
|----------|------|------------|--------------------|---------------|-------------------|
| 強力焼夷缶    | 缶入小型 | 一般放火用      | エレクトロン粉末、過塩素酸塩     | —             | 耐水缶入小型強力即時用摩擦点火   |
| 成型焼夷剤    | 小型   | 成型放火用      | エレクトロン粉末           | —             | 即時用摩擦点火           |
| テルミット焼夷剤 | 小型   | 難燃性物件放火用   | テルミット系             | 5メートル         | 即時用摩擦点火           |
| 発射焼夷筒    | 筒入小型 | 遠距離物件焼夷用   | マグナリウム過塩素酸塩        | 最大射程300メートル   | 焼夷500キロ<br>薬量18キロ |
| 散布式焼夷缶   | 缶入大型 | 散布型多放火点発生用 | 硝酸バリウム、アルミ粉末、セルロイド | 散布範囲半径100メートル | 取容小型弾子約50個        |
| 焼夷カード    | 板型   | 易燃性物件放火用   | 黄燐、竹               | —             | —                 |
| 点火用紙     | 小型   | 現地調整用      | 塩素酸カリ              | —             | 投擲用ガソリン           |
| 投擲火炎瓶用   | —    | —          | その他                | —             | 火炎瓶用濃硫酸使用         |

遊撃隊行動器材

| 種別     | 名称                                       | 用途   | 構造・性能   |
|--------|--|--|---|
| 夜間携行用具 | 防湿夜光時計<br>夜間連絡および標示板                     | 一般用<br>夜間連絡および標示板                              | 防水、防湿、非磁気携行時計<br>小型   |
| 渡渉用具   | 携帯用浮囊舟<br>渡渉衣<br>浮囊靴<br>浮囊[浮き袋]<br>簡易潜水具 | 渡渉用<br>渡渉用<br>渡渉用<br>渡渉用<br>潜水用                | 一人用・数人用、軽量ゴム布製(浮力100キロ、浮力500キロ)<br>小型浮囊[浮き袋]付<br>着囊のまま渡渉可能<br>直立状態で漕行<br>軽量チューブ型、浮力20キロ<br>身体隠匿用、鼻挿式、口呼吸型 |
| 攀登用具   | 攀登用錠<br>防水麻綱                             | 急峻な地形通過用<br>急峻な地形通過用                           | 小型錠に径10ミリ麻綱(防水ゴム仕上)を縛りつける、抗張力200キロ<br>防水ゴム加工と「カツチ」仕上を交互に旗竿式に仕上げ加工(径10ミリ)                                  |
| 近接用具   | 防水小麻綱<br>折畳自転車                           | 一般縛着用<br>近接行動                                  | 抗張力40キロ<br>折畳式携行用   |
| 耐水用資材  | 耐水通信紙<br>耐水マッチ                           | 通信用<br>耐水、耐風マッチ                                | 硫酸紙製<br>燃焼時間10秒 南方向き、耐スコール型   |
| 補力資材   | 耐水雑糞<br>防水背負袋<br>栄養剤<br>疲労回復剤<br>携帯食糧    | 信管、爆薬収納用<br>兵器・食料収納用<br>補力用<br>回復用<br>軽量、固体/粉体 | 耐水布製<br>耐水布製<br>強力ビタミン剤、急速栄養補給剤<br>頭脳及目の補力剤<br>一般市販品、改良品  |

(伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』をもとに作成)

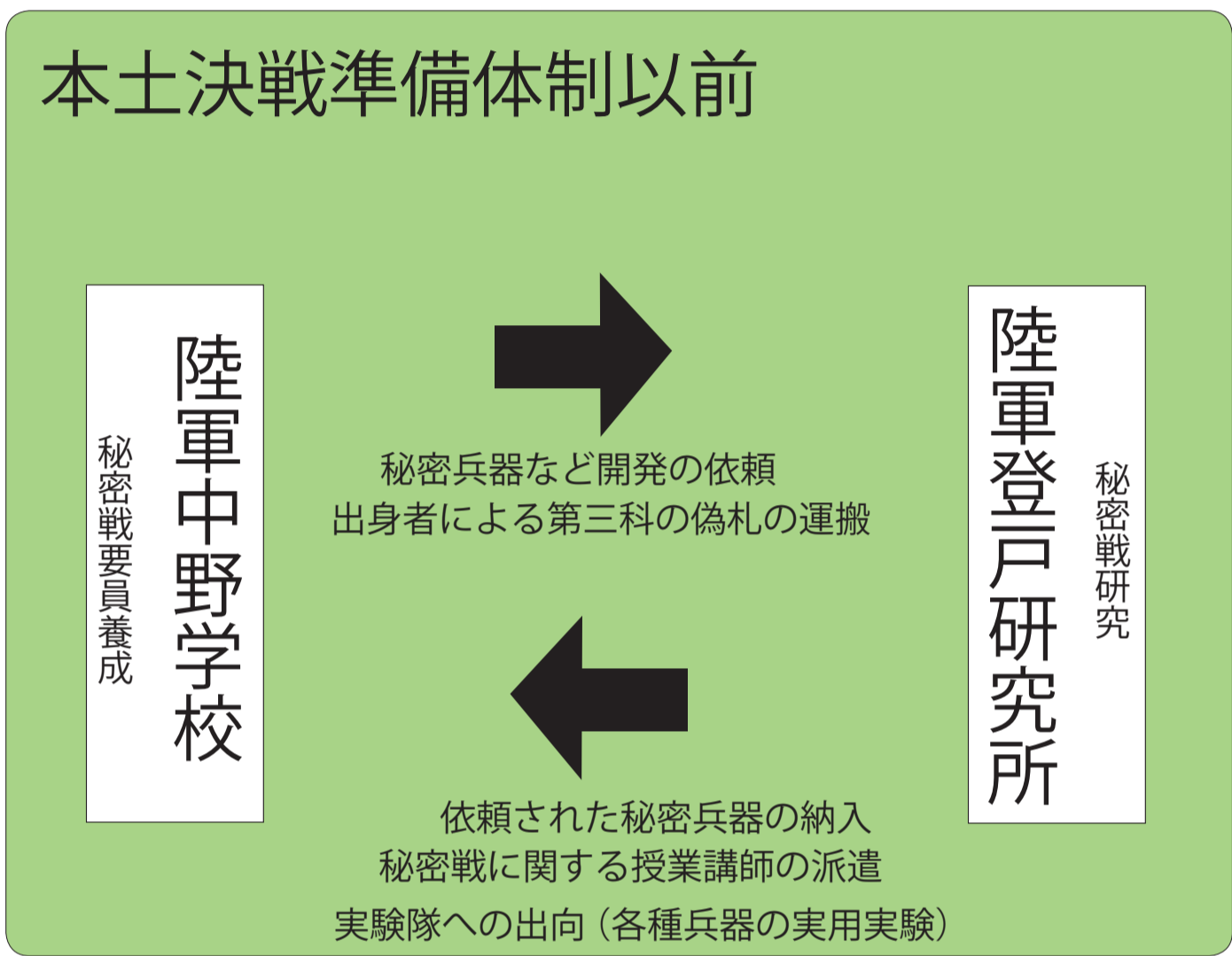
現地調達品—この言葉が意味するものは、左の登戸研究所が開発した遊撃部隊兵器のリストから分かってきます。ここに「缶詰型変形爆薬」とあるのは缶詰型爆弾であり、つまり、登戸研究所は中野学校と連携をとって遊撃戦を想定していた、ということです。それを裏付けるのが、国民義勇戦闘隊の組織についての登戸研究所元所員、北澤隆次氏の証言です。

### 元登戸研究所所員北澤隆次氏の証言—国民義勇戦闘隊組織の依頼

中野学校出身者が中心かどうかは知りませんが、登戸研究所には長野県軍管区司令部からだったと記憶していますが、通知があり、予想される上陸敵軍に対し、軍人以外の在郷男子が各郷土で組織を作り、抵抗する様指示されたと思います。登戸研究所にその通知が来たのは、昭和20年8月13日ではなかったかと思えます。前記抵抗組織の話は篠田所長か山田大佐か又は二人から私が軍人でなく文人でありましたので、この地区[上伊那地区]の準備の長となることを命ぜられました。私は先ず第一に人数を把握する必要がありましたので、8月14日に中沢村と伊那村の役場に行き、村長さんに面会して、前記目的のため、当時在村の国民学校生徒から5、60歳位までの健康な男子の人数を至急調査報告する様に依頼しました。帰りに、「数千人の組織になる大変なことだ」と考えたことを思い出しました。その翌日、終戦の大命が下り、すべてが終了しました。中野学校出身者が指導、運用する計画であったかどうか、その時点ではわたしは何も知りません。

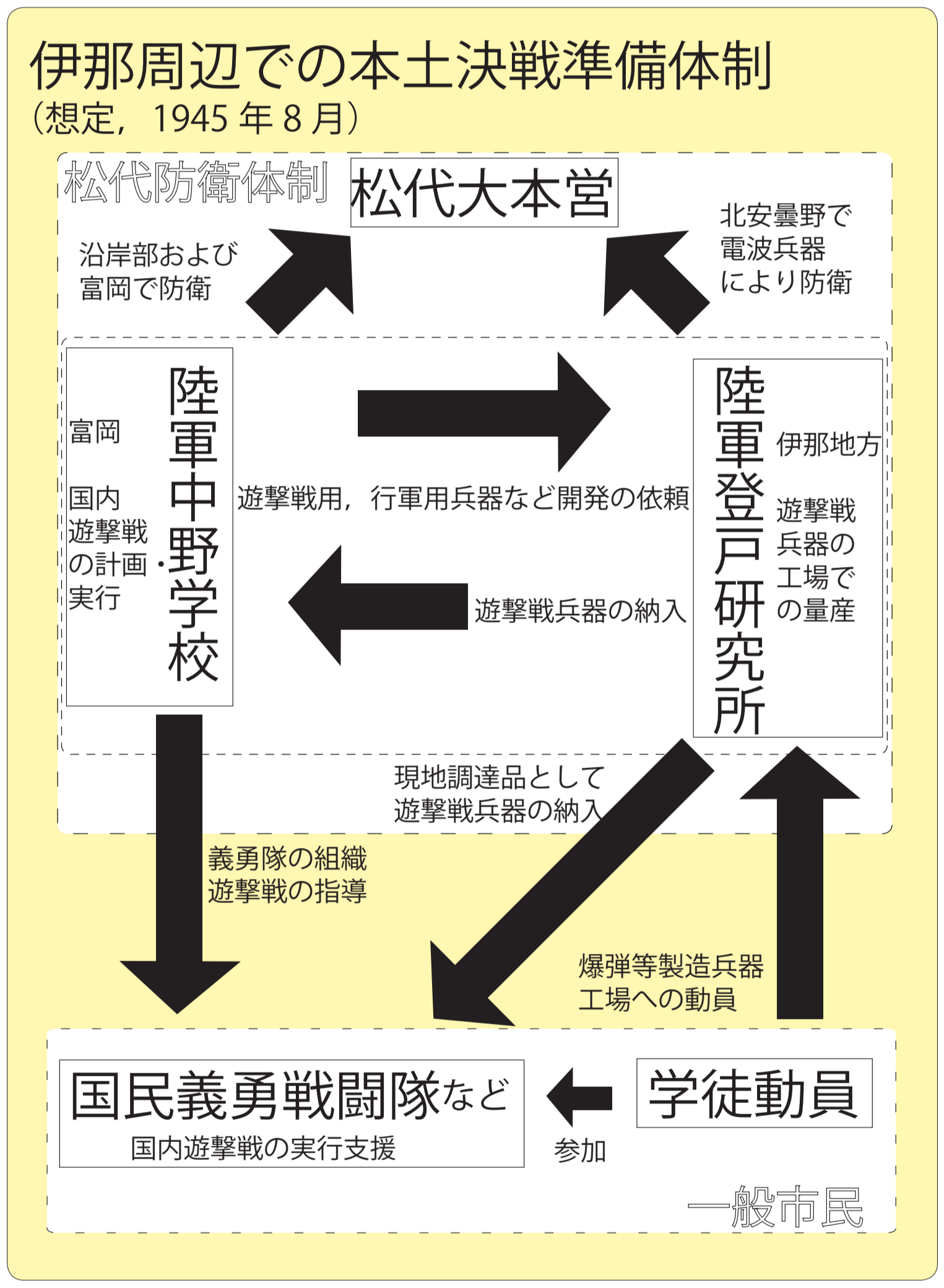
「北澤隆次氏書簡」(木下健蔵氏寄贈)を基に資料館書き起こし。(現物展示あり。)

この証言を見てみると、伊那谷においても国民義勇戦闘隊の組織が想定されていたことがわかります。1945(昭和20)年6月22日、政府は本土決戦に備えるため「義勇兵役法」を公布しました。男子は15歳から60歳まで、女子は17歳から40歳までを動員し国民義勇戦闘隊として軍の統制下に置くという国民のほぼ全てを戦闘補助要員とする法律でした。国民義勇戦闘隊の任務は、一般に塹壕を掘ったり、食糧や弾薬を輸送する後方勤務の雑役が想定されていましたが、16,7歳の「青少年戦闘隊」や「学生戦闘隊」は、上陸した敵軍の背後に回って遊撃戦や諜報活動などができるように訓練をしていました。陸軍の各地区司令部でこの指導にあたったのが、陸軍中野学校です。中野学校との関わりはここでは隠されたままですが、中野校友会編『陸軍中野学校』によると、精鋭部隊である関八州部隊による関東平野のゲリラ戦構想などから、中野学校の身分を隠して国民義勇戦闘隊の指導が想定されていたことが考えられます。すると、敗戦直前の伊那周辺での本土決戦体制が右下の図のように見えてきます。



大本営陸軍部作戦部長として本土決戦を指揮した宮崎周一も日記に次のように示しており、登戸研究所による兵器の製造がいかに期待されていたかが分かります。(『宮崎中将日記』より)

五月十三日  
一、登戸、焼夷剤製作状況  
爆薬 一六万 九月迄三分一 手持約一万  
七月初ヨリ増加、疎開伊那谷(中沢) 三分二  
篠山(小川) 三分一  
焼夷一六万 防水缶一万 防水マッチ一〇万



本土決戦準備下では登戸研究所、中野学校それぞれの本部が伊那谷、富岡にあり連絡の便が良く、松代大本営を防衛するネットワークでも関係が強化されました。任務が遊撃戦の教育と実行に特化された中野学校と、その資材を量産する登戸研究所は地元の国民義勇戦闘隊を介在させることで一体とも言える共同体制が完成したのです。登戸研究所は遊撃戦のための挺進部隊用爆破・焼夷・行動資材の製造、中野学校はそれを使用しての遊撃戦の実行という任務を課せられ、共に松代大本営を死守、すなわち「国体護持」のために秘密戦を展開する動きがあった事実が証明されます。

※挺進部隊…敵中深く潜入する部隊



### 旧中沢国民学校校舎

中沢国民学校には登戸研究所が中沢分室（製造所）として疎開し、伊那地域における研究部門の中心となった。多くの軍事物資が運び込まれ、教室や体練場が転用され設置された工場には学徒が多数動員された。

2013年9月資料館撮影



### 旧中沢国民学校校舎内部

現在は駒ヶ根市民俗資料館となっているが、天井、廊下、窓枠などは登戸研究所が疎開していた当時のままの状態で見られる。

2013年9月資料館撮影



### 中沢国民学校学校日誌

昭和十九年度・二十年版の学校日誌。関係者の来訪など登戸研究所疎開時の動向が記載されている。

2013年9月資料館撮影



真慶寺 室中の間

庶務関係の本部が疎開した宮田村・真慶寺。仏間に隣接した室中の間は研究所長篠田<sup>しのだ</sup> 鎌<sup>りょう</sup> 中将などの幹部のための秘密の会議室であり、また機密資料が保管されてもいたため、出入りができる者はごく少数に限られていた。

2013年9月資料館撮影



香花社

登戸研究所の工場となっていた、中沢地域の香花社。下の階段を上がると舞台があり、そこでは伊那商業学校の生徒が40人くらい動員され、旋盤で缶詰爆弾に使用するブリキの型抜きをしていた。

2013年9月資料館撮影



天竜川 穴山沖 河原

缶詰爆弾の爆破実験を、爆弾製造に動員された学徒が対岸から見学した場所。撮影日は台風で天竜川が増水していたが、通常、写真中央の位置に中洲状の河原があり、そこで爆破実験が行われた。

2013年9月資料館撮影



# 「本土決戦と秘密戦」実物展示一覧

## きたざわたかじ 北澤隆次氏書簡（奥）

北澤氏は登戸研究所の元技師。登戸研究所の中沢村への疎開は、北澤氏の故郷が中沢村だったため決定した。疎開先での編制等にも深く関わっており、中心人物の一人だったと推測される。書簡には、登戸研究所が中心となり長野県で国民義勇隊編成しようとしていたことが書かれている。

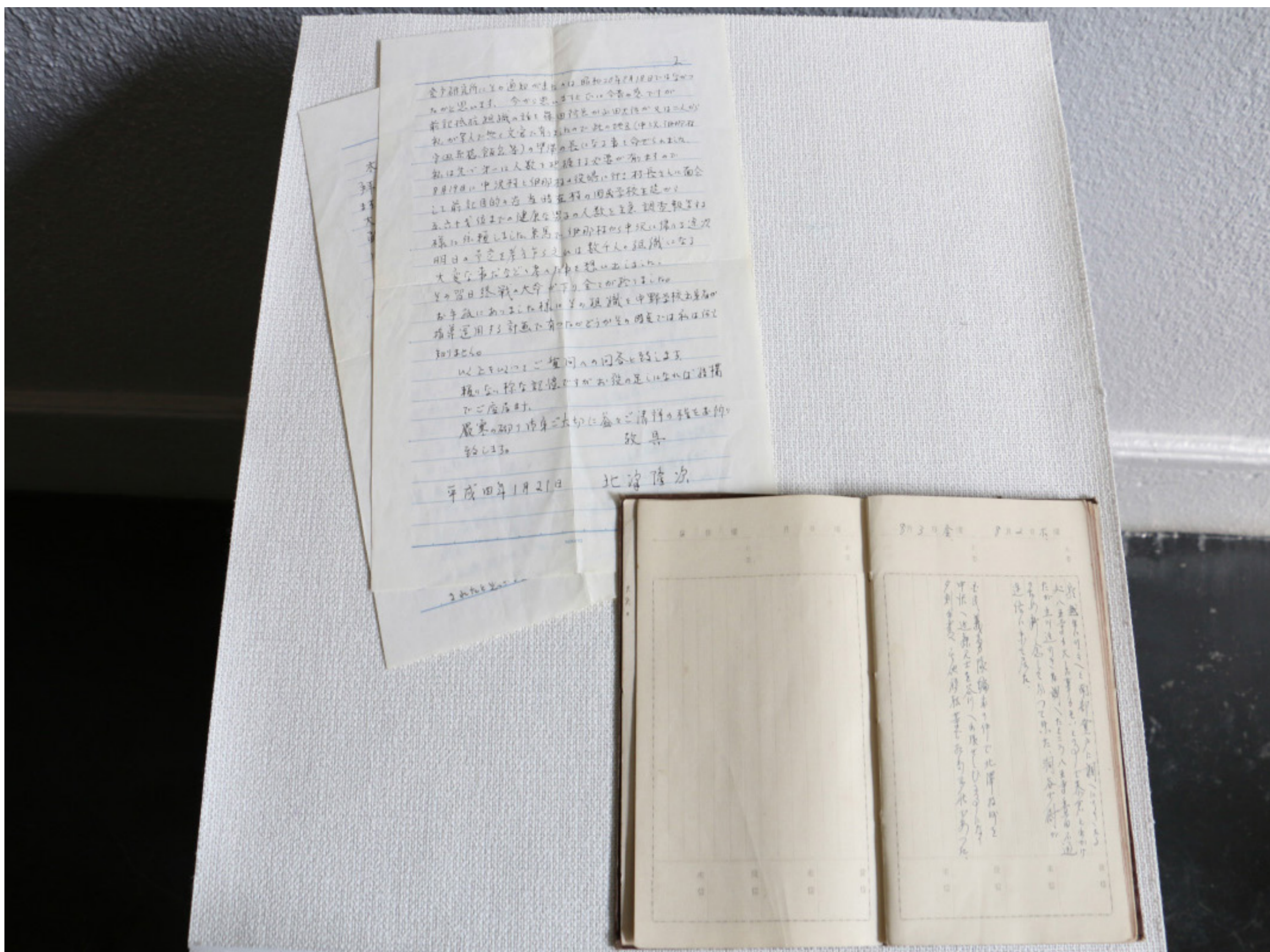
木下健蔵氏 寄贈

## おおつき 『大月日誌』（手前）

登戸研究所で庶務等を担当していた大月陸雄大尉の1945（昭和20）年1月1日～8月3日までの日誌。登戸研究所の各地への疎開についてなど、重要な記録が残されている。

この8月3日付日誌には、「国民義勇隊編成の件で北澤[隆次]技師を中沢へ近藤見[習]士[官]を谷川へ出張」させることが書かれている。

大月昌彦氏 寄贈



終戦間近に登戸研究所が中心となり、兵庫県小川村と長野県南伊那地方で国民義勇隊編成しようとしていたことが、『大月日誌』8月3日付の記録と「北澤隆次氏書簡」を併せて考えると見えてくる。

大本営は当初、米軍は1946年になってから関東に上陸すると想定していたが、8月に入るとその予測を早め、1945年秋には関東方面に米軍が上陸する可能性があるとして想定を変更した。

この大本営の予測の下、登戸研究所も急いで関東方面の本土決戦準備に移ったと考えられる。そして本土決戦時には、登戸研究所が中野学校と連携し、国民義勇隊を率いて遊撃戦を展開する準備をしていたことが考えられる。

## 登戸研究所旧所蔵書籍

長野県上伊那郡宮田村にある寶珠山真慶寺に残っている登戸研究所所蔵印のある書籍。同寺には約50冊の登戸研究所旧所蔵書籍が残されている。

真慶寺には1945（昭和20）年春以降、登戸研究所の「本部」が疎開しており、篠田所長など上層部が集まり「秘密会議」を行うこともあった。この書籍は上層部が使用していたものと推定される。

書籍天地には「登戸研究所」「陸軍登戸研究所」の蔵書印がみとめられる。また、天地蔵書印が黒塗りされたものもある。黒塗りされた書籍は、内側の蔵書印の「陸軍」もしくは「陸軍登戸」の部分も同様に黒塗りされている。

寶珠山 真慶寺 所蔵



奥（上から）

Irving C Ackerman 『The complete fox terrier』 New York , 1938 年

田中晋輔 『X線陰極線検査』 常盤書房, 1941 年

精松源一・鴛淵一・韓穆精阿 『増補三訂蒙和辞典』 甲文堂書店, 1937 年

畜産技術協会 『南圏畜産概要』 畜産技術協会, 1943 年

日本病理学会 『日本病理学会会誌 第4巻』 1915 年

手前

堀関夫 『鶏・蜘蛛・蜜蜂』 日新書院, 1942 年

# 「本土決戦と秘密戦」実物展示一覧



## ガスマスク

登戸研究所第二科疎開先の研究室の一つであった中沢地区H邸の二階から発見された。登戸研究所が用意したものであることは確実だが詳細は不明。「内務省規格品ヨ（甲）七年式防空用防毒面」とあるため、空襲の際の火災に備えるためのものであったと考えられる。

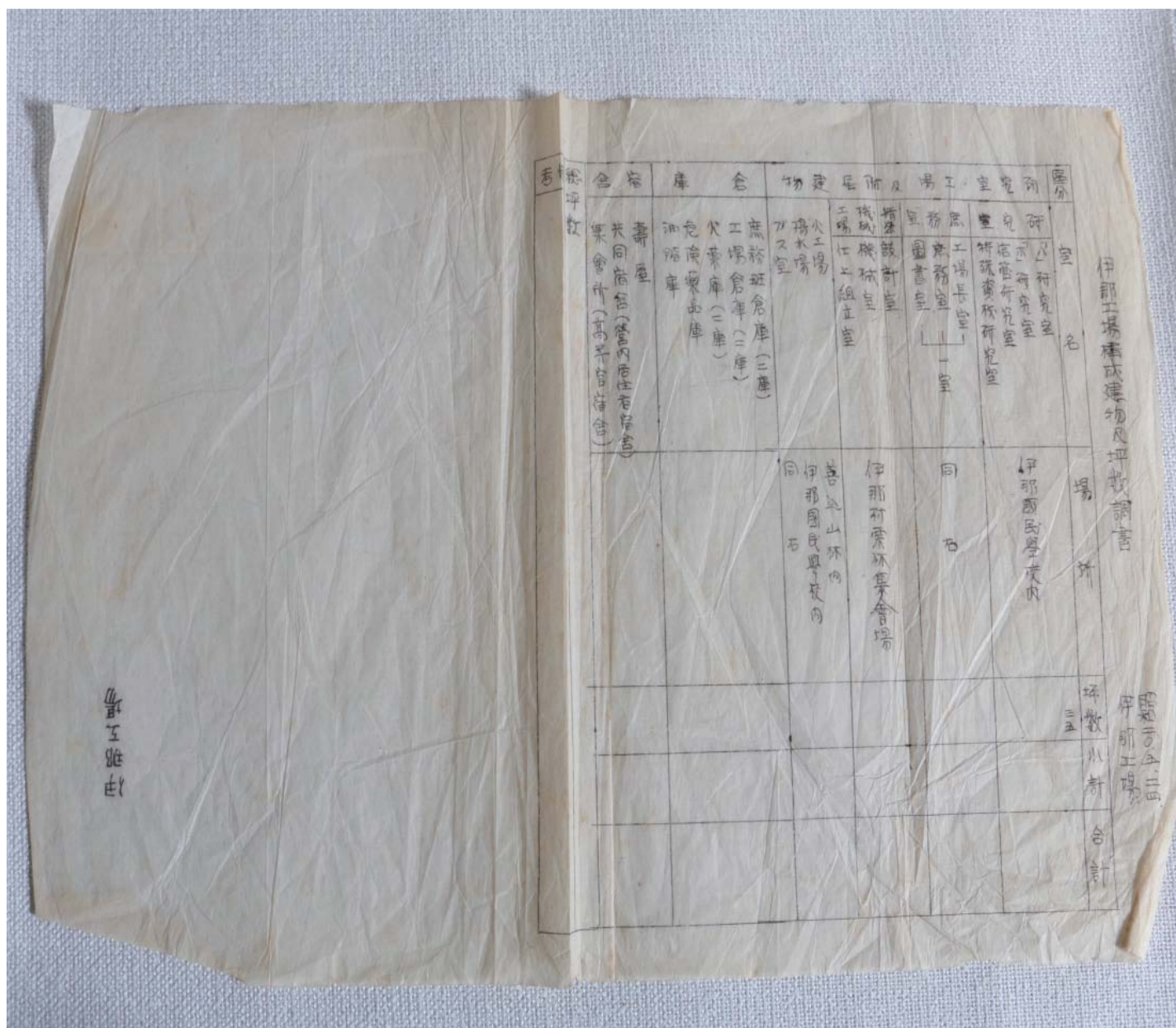
木下健蔵氏 寄贈



## 「時計式時限装置一号」用と思われる時計

詳細は不明だが、駒ヶ根市内の伴繁雄氏旧邸から発見された。伴氏が工場長であった伊那村分工場が扱っていたものであれば、同氏著書『登戸研究所の真実』にある遊撃部隊兵器のうち「時計式時限装置一号」の可能性が高い。図のように時限装置は缶詰爆弾につなげて使用することを想定していたようだ。

伴 幸雄氏 寄贈



## 「伊那工場 [ 伊那村分工場 ]

### こうせいしたもののおよびつぼすうちょうしよ構成建物及坪数調書

伴繁雄氏が伊那村分工場解散後も保管していたもの。工場にどのような施設が設置されたのかが読み取れる。ガス室が伊那村国民学校内に設置されたことや、国民学校以外に「伊那村栗林集会場」も使用する予定であったことなどがわかる。

木下健蔵氏 寄贈

# 謝 辞

本企画展を開催するにあたり、下記の方々・機関にご協力いただきました。  
記して感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)

NPO 法人安房文化遺産フォーラム

愛沢 伸雄 池田恵美子

飯島町立飯島小学校

大月 昌彦

上村 睦夫

菊池 実

気象庁精密地震観測室

木下 健蔵

栗山 武雄

駒ヶ根市教育委員会

駒ヶ根市民俗資料館

駒ヶ根市立赤穂小学校

駒ヶ根市立中沢小学校

駒ヶ根市立東伊那小学校

篠崎健一郎

竹村 寿彦

野中 達也

伴 幸雄

日吉台地下壕を保存する会

福井新聞社

伊与登志雄

寶珠山 真慶寺

松代大本営の保存をすすめる会

北原 高子 平岡 俊雄

三上 峰緒

宮下与兵衛